

2015年3月29日 基礎生物学専攻・助教・新村毅

(1) 参加者一覧

- ・ 新村 毅 (生命科学研究科基礎生物学専攻・特任助教・本研究会代表)
- ・ 塚原 直樹 (学融合推進センター・助教)
- ・ 中尾 央 (先導科学研究科生命共生体進化学専攻・助教)
- ・ 春藤 献一 (文化科学研究科国際日本研究専攻・総研大生 D3)
- ・ 東城 義則 (文化科学研究科地域文化学専攻・D5)

(2) 議論の概要 (web サイトで公開)

動物福祉は、文化、社会、科学などが複雑に絡む課題であるため、必然的に文理融合研究が必要とされる。今回の研究会では、先導科学研究科、生命科学研究科および文化科学研究科の研究者が一堂に会し、動物福祉に関するこれまでの情報を共有すると共に、動物福祉の今後に必要な研究課題および研究方法について、人文社会科学および生命科学の観点から議論した。議論の結果、人文社会科学的アプローチとしては、まず文化・宗教・社会情勢などの観点から動物福祉の世界的な動向を総合的に理解することが重要だと考えられた。さらに、日本における動物愛護の歴史の変遷を紐解き、ステークホルダーによる合意形成を経ることが、日本における動物福祉のガイドラインを提唱する上で鍵となると思われた。また、生命科学的アプローチとしては、金網ケージに代わる革新的な福祉的飼育システムを開発すると同時に、卵などの畜産物を差別化してプレミアム価値を生むための総合的評価法を開発することの重要性、さらに、問題行動を人為的に制御する技術の開発として全く新しい発想に基づく研究展開が必要であることも示唆された。

(3) 当センターが行う「グローバル共同研究」事業や「学融合共同研究」事業への申請への展望 (web サイトで公開)

動物福祉は、文理融合研究が必要とされるものの、これまでそのような研究は見られなかった。しかし、総研大には、生命科学から人文社会科学に至るまで、専門分野の異なる世界的な研究者が多く在籍している。萌芽的研究会「動物福祉研究会」において、その可能性を模索した結果、総研大に所属する多様な研究者が協奏し、複合領域における1つの学問分野として「動物福祉学」の確立を目指すことが可能に思えた。具体的には、人文社会科学的アプローチとして、動物福祉の世界的な動向および日本における動物愛護の歴史の変遷を文化・宗教・社会情勢などの観点から理解し、さらにはステークホルダーによる合意形成を経て、日本における動物福祉のガイドラインを提唱することが1つの大きな目標となりうる。また、生命科学的アプローチとしては、金網ケージに代わる革新的な福祉的飼育システムを

開発すると同時に、卵などの畜産物を差別化してプレミアム価値を生むための総合的評価法を開発することが目標となりうる。さらに、問題行動の制御技術として、動物の音声コミュニケーションを操ることで、共食いなどの問題行動を人為的に制御する技術を開発することも重要と考えられた。以上のように、動物福祉は、異分野融合、社会連携、基盤連携、国際連携を機能させる優れたテーマであり、総研大でこそ成し遂げられる研究課題である。したがって、この課題は、「グローバル共同研究」事業および「学融合共同研究」事業の趣旨に合致したものであると考えられる。